

## 天球丸・北側石垣 No.13

平成に入ると、修理に伴って石垣内部の発掘調査が実施されるようになり、鳥取城でも全国に先駆けた取り組みが始まります。天球丸の城下側に大きく張り出した石垣は、もともと屈折ピラミッドのような様相を呈していましたが(写真④)、屈折部分で石垣の継ぎ足しが判明しました。また、天球丸の中央部地下から、屈折部分の高さを底面とする石段(写真⑤)も見つかり、少なくとも天球丸北側は元来2段に区画されていたこともわかりました。なお、発掘調査成果や、絵図などの検討から、現存する天球丸の姿は、正保元年(1644)までの池田光仲の時代に整備されたと考えられています。



## 天球丸・巻石垣 No.19

文化4年(1807)頃に背後の石垣崩落防止のために築かれた補強石垣で、平成23年度(2011)に復元完成しました。それまでの文化財の石垣修理は、創建時の姿に復することが一般的でした。しかし、鳥取城跡では、江戸時代の補強による石垣修理は、その当時の石垣保全の在り方を示す大切な事象であるという認識のもと積極的に再現し、我が国の石垣修理の在り方に一石を投じました。



## 天球丸・腰石垣 No.20

美術工芸品の文化財修理が修理前後の見分けがつかないほど高度な修理であるのと同様に、平成25年度以降、鳥取城の石垣修理も、修理前後が分別付かない修理を目指しています。この修理手法は「石が戻りたいところに戻す修理」と称され、極めて高度なものです。また、石垣内部の栗石も、現在は、職人が一石ずつ石の形状や大きさを見極めて丁寧に組むように配石しながら締固めを行っており、徹底した伝統工法により石垣全体の安定性を高めています(写真⑥)。

